

瀧亭鯉丈の文学

大内, 保宏
鎮西女子高等学校教諭

<https://doi.org/10.15017/10413>

出版情報 : 文献探究. 21, pp.11-23, 1988-03-25. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

瀧亭鯉丈の文学

大内 保宏

瀧亭鯉丈という作家は、江戸の後期小説いわゆる戯作文学がやや衰退に向かい始めた文政年間に現われて代表作の滑稽本『八笑人』

その他で江戸の小説界に独自の世界を開いた戯作者の一人である。にもかかわらず、滝沢馬琴・為永春水・柳亭種彦等の華々しい光の陰に隠れて鯉丈はあまり顧みられない傾きがある。また、たまに評価されることがあってもそれは『八笑人』などのごく限られた作品についてにすぎない。その他の作品は、いつもきまりきった表現でのみしか評価を受けないし、むしろ、正当な評価を受けていない作品のほうが多い。そこで、筆者は現存する作品を中心にしながら今は現存しない作品を含めて鯉丈の全著作を個々に検討したく筆を取った。そして、鯉丈という一戯作者の描いた世界と趣向を少しでも明らかにしてみようと思うのである。

二

瀧亭鯉丈が戯作者として江戸の文壇に名前が初めて登場したのは滑稽本『大山 栗毛後駿馬』(六冊)である。『栗毛後駿馬』は、初編が文化十四年刊、二編が文政元年刊、三編が文政四年刊で、画は歌川国直、板元は連玉堂加賀屋源助である。この『栗毛後駿馬』には改題再版本がある。それは、『大山道中膝栗毛』という滑稽本で、画は歌川国直、刊年は初・二編が天保三年、三編が天保四年刊、板元は不明である。

この『栗毛後駿馬』という作品は、題名が示す通り十返舎一九の滑稽本『道中膝栗毛』(享和二々文化十一年刊)があまりにも好評

であったが為にその好評にあやかろうと続々と出版されたいわゆる「膝栗毛物」という範疇にはいる作品の一つである。梗概は次の通りである。

「梗概」

(初編) 江戸浅草八丁堀の徳郎兵衛は、大山参詣のために福七という男を連れて参詣の日を間違えたまま出立する。日本橋、品川を通り大森の村に着く。他の講中に紛れて飲み食いをしてはれそ

うになったりして大騒ぎをしながら六郷の川端で川を渡る。
(二編) 大木切りの手伝いなどをしては、籠かきなどにだまされながら台の坂口に着く。

(三編) 戸塚を過ぎ、猿の珍しい鎖に欲がくらみ猿を買うが鎖は手に入らない。猿は徳郎兵衛の乗った馬の上で馬にいたずらをして、馬は徳郎兵衛をのせたまま疾走する。

この梗概からも本作と『膝栗毛』との趣向の類似が窺えよう。『膝栗毛』では、神田の八丁堀辺に住む一人住みの弥次郎兵衛というのうらく者が食客の北八と旅に出るといふ設定だったが、本作では浅草八丁堀九丁目に住む百福屋の徳郎兵衛という遊び人と福七というのうらく者が、相模国兩夫利神社へ参詣するといふ設定となっている。しかし、その人物像には若干の相違がある。中村幸彦氏は、「弥次郎兵衛・北八論」の中で、弥次・北を「しみたれた欲望を持ち、友人を裏切り、見え坊で恥知らずで小心者で、計画性もなく、からりきみで、健忘症という性格を持つしみたれた悪人」と言われている。つまり、弥次・北という二人の人物は、小悪人と

しての強い個性を持っている二人なのである。この二人に比べる
と、徳郎兵衛・福七は、見え坊ではあるが、知ったかぶり、気が
弱く、お人好しで人にだまされてばかりで、どこか抜けていておし
はそれほど強くないという性格を持っていて弥次・北ほどの強烈な
個性は持たない。

次に趣向について見てみよう。ここでもやはり『膝栗毛』より趣
向を借りたと思われる箇所が多い。『膝栗毛』初編で、小田原の宿
で弥次・北が宿屋の女と色事の手はずを整えるが、いつまでも来な
いので聞いてみると臨時雇いでもう帰ったと言われる所がある。
『栗毛後駿馬』では三編上に徳郎兵衛・福七が戸塚の本宿で旅籠の
女をものにしてようと算段するが、いつころに来ないので人に聞くと
女たちは親類の手伝い人でもう帰ったと言われるくだりがあり、ま
さに同一の趣向である。他にも、初編上で福七が御状箱の飛脚にけ
とばされるのは、『膝栗毛』二編上で御状箱の人足の御状箱の角に
弥次が当たる所、又、二編上で福七がこじき旅人に銭をねだられ馬
から落ちるの所、『膝栗毛』三編上で巡礼に銭をせがまれて北八が
籠から落ちる所という様に趣向の上で類似した所が多い。

このように見ていくならば、本作はあまりにも『膝栗毛』に類似
しているように見えるが実はそうではない。よく見ると本作は『膝
栗毛』のように道中案内記的性格も持たず、又、弥次・北の二人の
強烈な個性が繰り広げる芝居としての要素もあまりない。これは、
鯉丈の作家としての力量がそこまでいかなかったということではな
く、むしろ、鯉丈の目的が別の所にあった、すなわち、本作におい
ては様々なユーモラスな寸劇の妙を描きたかったことによるものと
思われる。そのことは、この後順次刊行される彼の作品を見ていく
ことよって次第にあきらかとなる。

三

次に、鯉丈は、滑稽本『花暦八笑人』（十五冊）を書いている。
初編は、文政二年刊、二編文政四年刊、三編文政六年刊、三編追加
文政七年刊、四編文政十一年刊、四編追加天保五年刊である。画
は、溪斎英泉と歌川国直による。五編は他作者による続編で上巻が
一筆庵主人（溪斎英泉）、中・下巻が興鳳亭枝成作による。その画
は、上巻が一勇斎（歌川）国芳、中・下巻が歌川芳綱で嘉永二年刊
である。板元は初編から三編までが文栄堂大島屋伝右衛門（？）、
三編追加は、双鶴堂鶴屋金助、青林堂越前屋長次郎、文栄堂大島屋
伝右衛門、四編・四編追加は、西村屋与八と文栄堂大島屋伝右衛
門、五編は文栄堂大島屋伝右衛門である。

『八笑人』の梗概から見て行こう。

「梗概」

（初編）春、左次郎が中心となって飛鳥山で敵討ちの趣向の茶番
を行なうが、途中で邪魔が入り失敗。

（二編）野呂松が主人公となり、侍との立ちまわりの趣向を考え
るが思う通りいかず失敗。

（三編・三編追加）夏、卒八は両国の橋の上での趣向を考える
が母に格まれ失敗。

（四編・四編追加）眼七が、武家の隠居の賀の祝いの趣向をたく
らむが、いろいろ手違いをして失敗。しかし、その失敗がかえつ
てうける。

（五編）阿波太郎が主となり、向島での狸ばやし趣向となる
が、十返舎一九ら戯作者達に騙され失敗。

以上のような内容をもつ『八笑人』は『滑稽和合人』と共に茶番を
主な趣向とする作品である。鯉丈は実際に巷間で行われた茶番を彼
の作品のなかにうまく取り込んでいたのである。茶番を演じた人
物たちはみんな鯉丈の知り合いであったようである。『八笑人』の

モデルについては、三田村篤魚が『滑稽本概説』^④の中で、

(前略) 井上頼田翁のお話を承ったことがあります、あの中の左次郎・卒八・阿波太郎・眼七・野呂松・出目助・凶武六・呑七などという者は、皆その当人がある。鯉文が考え出したものではない。

と述べて、阿波太郎は御本丸十九番組の御徒士であった高柳兵助の弟、左次郎は狂歌で千種庵二世諸持、音曲で都一閑斎と名乗った浅草材木町の名主勝田權左衛門、卒八は鯉文自身で都八造という都の三味線弾きの名前から由来したのとしてゐる。それらの実在の鯉文の仲間たちが、

(前略)、飛鳥山の「かつぎ茶番」は、(略)、この男(「アバさん」と呼ばれている高柳兵助という御徒士の弟——筆者注)が考えたので、はじめは上野でやるつもりでありましたが、あそこは山同心がおって、三味線を弾いて騒ぐことを許さない、飛鳥山には山同心もいないし、三味線を弾いても差し支えないから、あちらのほうがいいというわけで、アバさんが選んで、飛鳥山でやるようになったのだ、ということでありました。——

(三田村篤魚、前掲書)

と仲間内で仕組んで行なった茶番を『八笑人』に利用したのである。実在の人物によって実在の場所で行なわれた茶番を趣向として利用したからこそ本作品はその作品的価値を持ち得たといえる。

鯉文はもう一つ趣向として利用したものがあつた。それは作品名が示す通り「花暦」なのである。「花を四季の順に並べて、花の咲く時節と名所を記して作った暦である」^⑤の「花暦」である。初編の琴通舎英賀による序にも、

八笑人やうじんを開ひらいて花暦はなごよみをしるは、阿房あほうをみて戯作げさくに笑はんが為なりとあるように、鯉文は『八笑人』の中に季節や季節の風物・名所を

おりこんで登場人物をひきたたせ滑稽さを強調し茶番により実在感を持たせたかったのではないか。「八笑人」は「モデル」と「季節感」により世間で好評を博した滑稽本であったのである。

四

文政六年に鯉文は滑稽本『浮世床』三編(三冊)を刊行している。歌川国直画で、出版書肆は、双鶴堂鶴屋金助、青林堂越前屋長次郎、文栄堂堺屋国蔵である。下巻巻末の出版目録を見ると四編の出版予定があり稿本まで出来ていたようであるが刊行はされなかったようである。本作は作品名が示す通り式亭三馬作の初・二編に続くものである。その内容について見てみよう。

「梗概」

(上巻)

- ① 隠居の曲げぶし落ちる。
- ② 昔七・惣太郎の茶番話。
- ③ 鬢五郎が齒痛女を身投げと間違えた話。(中巻)

① 隠居の宗旨談議。

② 隠居と昔七の茶番の相談。

③ 昔八の下駄の齒の欠けた話。

④ 盲蔵が字を読めない話。

⑤ 仙女香の話。

⑥ 状吉が喧嘩をした話。(下巻)

① 築兵衛の友達の色事にはまった話と自分の失敗談。

② 状吉の馴染みの女の話。

この鯉文の続編と三馬の初・二編について比較してみよう。髪結床での主の鬢五郎と使用人留吉と客などのやり取りが主な内容という

点では両作とも同じであるが、全体の場面の数は、三馬の初編が二十四の話から成り立っているのに対して鯉丈の三編は十一と少ない。登場人物の数にしても三馬の初編が二十人以上も出てくるのに対して鯉丈の方は八人と少ない。三馬が浮世物真似の手法を使い場面を何度も変えて大勢の人間たちを登場させ話の情景が生き生きと浮かんでくることを企図しているのに対し鯉丈は登場人物や情景描写にあまり意をそそいでいないように思われる。三馬と鯉丈とは趣向の上で明らかに意図するものが違うと思われるのである。鯉丈は三馬の作から作品としての名声と髮結床という舞台設定を借りつつ自分流の茶番を登場人物たちに演じさせたかった——つまり「話」そのものを書きたかったものと思われるが、やはり世評は気になつたらしく三編下巻の末尾に次のような文句が見える。

(前略)・此三編の拙きハ、下ずりの留吉に、なでつけさせたと思給へかし。

『浮世床』三編と同じ文政六年から鯉丈は『八笑人』と並ぶ代表作の一つである『和合人』(十五冊)を刊行する。初編から三編(二編追加を含む)までで、文政六年から天保十二年までの刊行、画は深齋英泉である。出版書肆は、双鶴堂鶴屋金助、青林堂越前屋長次郎、永寿堂西村屋与八、耕書堂萬屋重三郎、文栄堂大島屋伝右衛門、文深堂丁字屋平兵衛である。本作には為永春水による四編があり、弘化元年刊で画は深齋英泉、出版書肆は丁字屋平兵衛である。又、三編下巻の鯉丈の言によれば三編追加の刊行予定もあつたようだ。

「梗概」

(初編) 快遊亭の主人和次郎が仲間の矢場七、張吉、茶見蔵に騙されかけて彼らに仕返ししようとするがうまく行かない。

(二編) 茶見蔵が、和次郎の茶番にかかると、土場六と揚次郎の招待による日見の宴に皆出かけてそれぞれの茶番を出し合う。

(三編) 頃は秋となり、快遊亭にいる和次郎達は矢場七、土場六たちの茶番にひっかかる。一騒動の後、次の朝、彼らは皆で大師河原に出かける。

(四編) 和次郎ら六人は大師河原を目指して行くが、途中上方者の酒をあてにしたり商売人をからかったり醜女にちょっかいを出したりしながら生麦に着く。

『和合人』は茶番を主な趣向とする作品で『八笑人』とは基本的に同じ趣向の作品である。しかし詳しく見てみると若干の差異が認められる。『八笑人』ではうまく季節感を折り込みながら一編に一つの茶番を盛り込み茶番を主題としながら全体を数編の茶番で構成していくという手法であつた。しかし、『和合人』では必ずしも茶番のみを主題として話が展開してはいないようである。また、本作で扱われている茶番は、趣向を考へ道具立てをしてさらに見物人をもかつぐといったいわゆる「かつぎ茶番」というほどのきちんとした規模のあるものではない。室内でしかも簡単な道具立てで仲間内で行なう形の小規模な茶番であり中にはただ仲間内ですらする程度のものさえある。さらに、『八笑人』では、大体一編で一話が終わっているのに対して『和合人』では話が次の編まで持ち越しているし、三編では大師河原に出かけるというように「膝栗毛物」の様相まで呈している。これは、『和合人』が鯉丈の仲間内で実際にあつた事の寄せ集めということに一因しているのではないか。だから、一話で終わる必要もないし茶番と「膝栗毛物」とが同居しているのである。

なお、鳶魚によれば、本作にも、やはり『八笑人』同様登場人物にはモデルがある。例えば、和次郎は『八笑人』の左次郎のモデル

の浅草材木町の名主勝田権左衛門（千種庵諸持、宇治紫文）、二編追加で登場する愚慢大人は御蔵前の伊勢四郎か札差の伊勢屋青地四郎左衛門であろうという⑩。

文政七年には滑稽本『修牛島土産』（三冊）が刊行された。溪斎英泉画で、出版書肆は、双鶴堂鶴屋金助、文栄堂大島屋伝右衛門、青林堂越前屋長次郎である。

「梗概」

隅田川畔の牛島に八曲庵地山という男がいて、地山は家僕の純助、一助ともう一人の三人で隠居を雷の茶番で驚かそうと算段をする。やがて、隠居がやって来て隠居から家僕たちが生花の伝授などを受けていると外で雷がなり茶番が始まる。隠居が怖がり出すと地山が茶番の種を披露して大笑いとなる。

以上が『牛島土産』の梗概である。本作には、副題の「做風流八人芸」や、自序中の、

（前略）お子様方のお目覚しに、牛島氏が一毛なれど、八人芸を御覧あそばせ

主人公の名前の八曲庵地山など、頻りに「八」という数字を出しているが、その意図するところがいま一つ明らかでなく、趣向的には『和合人』とよく似た作品となっている。おそらく、本作も『八笑人』、『和合人』などと同様に鯉丈の仲間内で実際に行われた茶番などを作品にしたのだろうが、下之巻に、

（前略）千に一ツも御意に叶ハゞ早速次編をつぎ出し、とあることからすると、或は以降に出版される筈の続編が「八人芸」となるものであったかもしれない。作中に三味線などの芸事の話が出ているのは、鯉丈の芸人という職業から出た発想であり趣向であったのかもしれない。

翌文政八年には滑稽本『旅旅々々女』が刊行されたことに『国書総目録』ではなっているが、『日本小説年表』によるものらしく所在がわからない。筆者未見である。

五

文政九年、鯉丈は、彼にとっては最初の人情本である『若若小白山 靈験浮名の瀧水』（三冊）を刊行している。勝川春扇画である。本作は、南仙笑楚満人校訂とあるので鯉丈の草稿に為永春水が手を入れて成ったものであろう。本作は、埼玉県熊谷市立図書館に巻之下が唯一現存するのみであり、その板本には刊記が無いので、出版書肆は不明である。巻之下だけはあるが、その梗概を述べてみよう。

「梗概」（巻之下）

八月十五日、鶴ヶ岡八幡宮の縁日に、助蔵の家に大屋の六右衛門が来る。助蔵へ妻お為と仲直りするよう言い帰る。お菊という娘がやって来るので、その恋人孝介はお菊を帰そうとしていると、六右衛門とお為がやって来る。お為はお菊につかみかかるが、助蔵が二人の仲を説明してお為の怒りはとける。そして、四人の身の上もわかり皆不思議な縁を感じる。

この巻之下だけでは本作全体の内容を論ずることは難しいが、次の項で人情本『女小学』と共にその内容について考察してみたい。

天保元年には鯉丈にとって二作しかない人情本のいま一つである『珍珍説 女小学』（前後集各三巻）が刊行される。前集は浅草亭梅里、後集は泉晁・泉寿画である。出版書肆は、連玉堂加賀屋源助と思われる。しかし、これは瀧亭鯉丈作とするにはやや問題があるように思われるのである。まず、前集の為永春水の序に、

(前略)、されど鯉文子上の巻を、草した斗りて漫に旅行す、後の條を如何かする、と書肆が責も所なし、おのれ作者に因もあれば、(中略)、舎友に諱りて後冊を新に巧ミ全部して、這回梓に上すになん、――

とあり、又、同じく前集下の松亭金水による跋には、

(前略)、こゝに瀧亭鯉文子ハ。(中略)。――書肆より、誂らへられし中本の。赴向ハ胸に置てあれど友の勤めに腹にある。筋を荷物と伊勢詣。後で困るハ板元の。どうした物と――。(前略)。待どかへらぬくら暗に。大和めぐりは夢にもしらず。時好の後れん夏を歎くよりて吾友狂訓老人。足らぬをちよつと補なつて。全部にせよとの示しにより。(中略)。書走らしたる二三のまき。――

とある。瀧亭鯉文子が『女小学』前集のみを執筆して伊勢から大和を巡る旅に出た為に、書肆(連玉堂加賀屋源助)の要請によつて春水が後集の執筆をいわゆる為永連の一員である松亭金水に依頼したので、金水が後集を執筆したというのである。春水の序に、「上の巻」とあるので前集でも上のみ鯉文の執筆かとも考えられるところであるが、前集の内題下の作者名は上・中・下巻共「瀧亭鯉文戯作」となっている。一方、後集では上巻が「瀧亭鯉文聞」とあるのみで中、下巻には作者名が無い。かれこれ考え合わせると、松亭金水が執筆したのは後集であり、それに伊勢の旅から帰った鯉文が目を通して出版されたのであろうと思われる。したがって、本作は鯉文一人の手に成る物とは云い難いのであるが、一応その校閲を経たものとして見て行くこととしたい。

「梗概」

△前集▽武蔵の国の金沢に稲野谷半兵衛という武士がいて遊びす

ぎて勤当になる。二、三年後の八月末、瀬戸明神に参る途中逢身屋という所で彼は恋人のおひなにあう。しばらくの逢瀬の後おひなは帰る。しかし、すぐに下女おつながおひなのさらわれたことを知らせる。探すけれども見つからない。おひなは芸者となっていて秋蔵という男に八百屋半兵衛という男の恋人になるように勧められるが、おひなは承知しないので、秋蔵と八百屋半兵衛は怒って出て行く。その二人を追ったおひながふと兩宿りをしたのが、稲野谷半兵衛の家でそこには下女おつなもいた。

△後集▽稲野谷半兵衛は人の気配に気づき、おひなを中に入れ三人で互いの事情を語り合う。おつなは身をひこうと外に出て、稲野谷半兵衛も外に出たすきに再びおひなは盗人にさらわれる。大磯で盗人団兵六はおひなに身を売れと脅かすが聞かないので森の社の欄干に縛る。そこで八百屋半兵衛の妻おちよに会い、二人のわだかまりは解けおちよの家に行く。おひなを探すために稲野谷半兵衛は大磯で働き、ひよんな事から八百屋半兵衛も加わつておひなを探すが見つからないので八百屋半兵衛の家に行くところにおひながいて二人は再開する。そして、二人は結ばれ稲野谷半兵衛はもとの武士に戻る。

以上が『女小学』の梗概である。鯉文作の人情本には前述の『靈験浮名の瀧水』とこの『女小学』しかないのであるが、両者は内容的には随分傾向の異なる作品である。『女小学』が浪人と町人との間の恋愛で作品世界も鎌倉・大磯と広く、主人公のおひなが二度も誘拐されるなど数奇な運命をたどり、非常に猟奇的であり劇的で読本的な傾向をもつ人情本である。それに対して、『靈験浮名の瀧水』は世界も一町家であり市井の男女の嫉妬や誤解の入り交じったごく平凡な恋愛を描いた作品である。

『女小学』という作品名は、江戸時代において版を重ねた女訓書

の『女大学』や『女小学』から借りた物であろうが、趣向の上からはあまり関係がない。しかし、先に述べた本作の成立過程を考え合わせ少し気になる作品がある。それは二世穂満人（為永春水）作の『浮世 婦女今川』という同じ様に女訓書の名前を持つ人情本である。千兆、英笑、芳藤画で、初・二編が文政九年刊、三編は文政十一年間である。初編自序の「婦女の教訓」の爲にという出版の題目などは『女小学』と共通であろうし、作者や外題、画工などを考え合わせると、『婦女今川』と『女小学』とは何か出版経過の上で関連があるのかもしれない。『女小学』後編を書いた松亭金水などの存在を考えると、『婦女今川』は、『女小学』が春水を中心とした為永連の戯作量産の産物の一端であることをうかがわせる作品なのである。

六

天保二年には、滑稽本『滑稽 質屋雑談』（三冊）が刊行される。歌川国芳画である。但し、現在版本の存在は不明で、テキストとして『江戸時代文化』第一巻の覆刻が知られる。

「梗概」

（巻之上）

① 金びら老婆の世間話。

② のみ助が質入れに来る。

③ 隠居が伝築坊に小便をかけた話。

（巻之中）

① 隠居のかつがれた話。

② 相撲の話。

③ 隠居の知ったかぶり。

④ 竹馬が質受けに来る。吉原の話。

（巻之下）

① 隠居が治部右衛門という男の召し返される祝の茶番について話す。

② 成立の稽古の最中、隠居の足が伝築坊にあたって大騒ぎとなる話。

③ 隠居の付贅がなくなり又大騒ぎ。

一読すれば、本作は鯉丈が文政六年に式亭三馬作の続編として刊行した『浮世床』三編とは、作品の舞台となる場所こそ違っているがその世界や趣向は同じであることがわかる。江戸浅草並木辺にある七ツ屋何がしという質屋においてそこに入りする人たちが世間話をしたりして話は進行していく。本作もやはり最初から最後まで一貫した筋を持たないで小話をいくつも集めた形をとっている。『浮世床』三編と同様に、登場人物を大勢繰り出してその人物を精細に眼前に想起させるような式亭三馬流の手法は使っていない。本作でもやはり話そのものや面白い趣向を描くことが作者鯉丈の目的とするところなのである。

鯉丈は、天保三年から翌四年にかけて滑稽本『大山道中膝栗毛』（六冊）を刊行しているが、本作品は文化十四年初編刊の滑稽本『大山 栗毛後駿馬』の改題再版であることは前に述べた。

天保四年には、滑稽本『人間万事虚誕計』後編（一冊）が出されている。香蝶楼（歌川）国貞画で、板元は、永寿堂西村屋与八である。作品名からもわかるとおり式亭三馬作の滑稽本『人間万事虚誕計』初編（文化十年刊）の続編である。

三馬作の初編における趣向は、戯作の趣向としてきわめて常套的な手段の一つである。人間の様々な面の「表裏」をあばくというものであり、全編様々な標題について「うそ」そして「まこと」とい

う形で展開する。鯉丈の統編も形式的には一応同じ形を踏襲している。

「梗概」

- ① 稽古所のうそ、稽古所のまこと。
- ② 奉公人請人のうそ、奉公人請人のまこと
- ③ 喧嘩のうそ、喧嘩のまこと。
- ④ 娼女のうそ、娼女のまこと
- ⑤ 解和人のうそ、解和人のまこと。
- ⑥ 水茶屋のうそ、水茶屋のまこと。
- ⑦ 浮気妾のうそ、浮気妾のまこと。
- ⑧ 利風流のうそ、利風流のまこと。
- ⑨ 町芸者のうそ、町芸者のまこと。

鯉丈作の統編は、「うそ」と「まこと」を対照させるという方法は同じだが、三馬の作に比べると内容的には非常に簡略であっさりしていて、しかも三馬のような細密な描写も穿ちもない。三馬作の形式と趣向を借りているに過ぎないと思えるところである。

ところで、三馬は初編の奥付で彼が出版を予定していた二編、三編の標目をあげている。

- ▲爺親の虚 ▲母親の虚 ▲放蕩子の虚 ▲姫の虚 ▲妾の虚 ▲主管の虚
- ▲小二の虚 ▲下女の虚 ▲假在行の虚 ▲傾城の虚 ▲嬢客の虚 ▲幫間
- の虚 ▲主人の虚 ▲酒客の虚 ▲禁酒の虚 ▲豪夫の虚 ▲草沢医生の虚
- ▲虚誕病の虚 ▲虚誕的の虚

これを、鯉丈作の統編の標目と比較してみると自然と鯉丈の作品に對する姿勢もわかってくるように思う。つまり、三馬が統編においてもあらゆる種類の町人を精力的に描いていこうとしていたのに比べ、鯉丈は三馬の作品の表面は踏襲しても内実において「話」に重点を置いてるように思えるのである。

次に、本書の成立過程について少し考えていきたい。鯉丈作の後編の叙に、

(前略)・訛言文華のたくミもなく、机上に溜る無陀書も。みじん積りて邪魔と成る。反古を集て持ゆく者は。作者根生板元魂。二役兼備の二世楚漢人。今は為永春水と。

という記述が見える。鯉丈が書きっぱなしで放置しておいた草稿を春水が出版したために本作が世に出ることとなったというのが、『女小学』と同様に出版人青林堂越前屋長次郎——為永春水の力なしには誕生しなかった作品なのである。

鯉丈は、天保九年に『滑稽雄談 伊勢土産二見杯』(三冊)を刊行する。春齋英笑画、板元は西村屋与八、加賀屋源助、大島屋伝右衛門、越前屋長次郎である。

この『伊勢土産二見杯』もまたいわゆる「膝栗毛物」の一つである。

「梗概」

冬木屋鴈七、赤絵屋弥助、抜田佐知右衛門、曲木錠吉、牧野車七、万守空左エ門たちは浅草辺の太々講の一人として春の伊勢路を旅している。雲手川までやってくると、渡り賃のいらぬ川と間違えて川の渡り賃が高いと川役人と言い争う。おさまりがつかず、当の鴈七のみを残して、船賃を無理に払い川を渡る。六軒という所の茶屋で方言を聞き違えたり、途中で旅籠屋の肩引きと騒動を起こしながらも皆々合流して松坂を通り、伊勢の名所巡りをする。

本作品は、前述した様に『女小学』前集にある為永春水の序文や松亭金水の跋文にあるとおり、鯉丈の文政末年の伊勢参宮の旅における見聞や実体験がその執筆動機や趣向に反映していると思われる。

る。鯉丈の自序に、

(前略)、袖の日記に尾に緒をつけ、おまけたつぶり虚言八百、綴合せし滑稽雑談、外題も其俣伊勢土産、御札に添て二見の杯、掃府のしるしと、青林堂へ送る。

とある事によつてもそのことがわかる。本作品が鯉丈の伊勢参宮にもついで書かれたものならば、天保初年から数年後において草稿が書かれていたと思われるところであるが、なぜ天保九年まで出版されなかったかは気になるところである。

本作品が意識して書かれたであろう作品に十返舎一九の『道中膝栗毛』があるが『膝栗毛』の伊勢を扱った部分と趣向面について比較をしてみる。『膝栗毛』では五編と五編追加(文化三年刊)で桑名から伊勢参宮までを扱っている。その中でも五編下が『伊勢土産二見杯』の行程と一致する部分である。『道中膝栗毛』が主要な宿場を舞台として狂歌などを詠じて話にくつもの山を設け名所記風な体裁を取っているのに対して、『伊勢土産二見杯』では雲出川の渡し話が話の大きな山となっていて具体的な地名や地域特有の事物もあまり出て来ず、極端な言い方をすれば別に伊勢路でなくても話は成立し得る様な感じであり、あまり鯉丈の伊勢参宮の体験は生かされていない様な出来である。あるいは、それが、天保九年まで出版されなかった理由であり、「後編へゆづり追々出版仕候」と作品中で予告しながら続編が刊行されなかった理由なのかもしれない。

七

『伊勢土産二見杯』が刊行されてまもない天保十二年に鯉丈はこの世を去る。そのあと刊行されたのが滑稽本『^①温箱根草』である。初・二編は弘化元年に鯉丈作、溪斎英泉画で、三編は弘化二年に二世為永春水(為永春笑)作、溪斎英泉画で、四編は弘化三年に同じく二世為永春水作、溪斎英泉画で出版されたことになってい

る。ただ、初・二編はいままで鯉丈の単独の作とされてきたがそれ

には少し問題があると思う。現存唯一のしかも板下本の岩瀬文庫所蔵本(初編のみ)の刊記によれば、瀧亭鯉丈編、為永春水(初代)^②補とあるからである。これによれば、初編は鯉丈が書いたものに春水が少し手を補ったことになる。二編は版本の所在が不明なので何とも言えないが、おそらく同じ様な成立事情であろう。『箱根草』の出版書肆については初編は大阪郡玉堂河内屋茂兵衛、江戸文永堂大島屋伝右衛門である。二編以降は春水による二編の序に、

(前略)、其處へつけ込む文永堂が好に出来た新板は(中略)初編から温泉だけに利もよく跡をく……

とあるし、三編の二世春水の序には、
(前略)書買文永堂の翁来て箱根草第三編を綴り得させよと乞ふとあることから、少なくとも文永堂が出版に参加していることはわかるけれども、本作が文永堂が単独で出版されたのか初編と同じ出版書肆で出版されたのかはなお検討しなければならぬ。

「梗概」

△初編▽三月初旬、滑稽仲間湯本屋塔兵衛、底倉屋宮二、堂島屋木賀蔵らは箱根湯治に出かける。途中で狂歌などを詠みながらある居酒屋にはいると木賀蔵がいなくなって大騒ぎ。茶屋の女と騒動を起こしながら川崎に着く。

△二編▽宮二は、いろいろと騒動を起こしたり諸所を見物したりして神奈川の宿に着く。そこで、又、宮二はだまされたりする。△三編▽三人は、箱根の塔の沢に着く。そこへ、江戸から鯉丈に代わって案内するという二世春水の手紙が来る。旅籠では種々の物売りとの間で一騒動起こしたり、隣の部屋の娘をものにしようとして大騒ぎをしたりする。

△四編▽塔の沢を出て三人は夜の山道を歩いて宮の下に着く。翌

日、隣部屋の上方者の夫婦とひらめを食べるが、二人があまり飲み食いをするので、意趣返しに蛇や雀を器の中に入れる。夫婦が蓋を開けて大騒ぎとなるが、旅籠の女房の仲裁でおさまり大酒盛となる。

本作品も、いわゆる「膝栗毛物」の一つである。能楽者数人が連れ立ってふいと旅に出してしまうという偶然性への依りかかり、話に間延びしたところが感じられる点、地名や登場人物の説明に必ずしも十分でないところがあるなど、他の鯉文作の「膝栗毛物」と同じ弱点をかかえている。一方で、本作独自の工夫も認められる。それは、いろいろなものごとを作品の趣向として取り込み話の平板化を防ごうとしている点である。「道中膝栗毛」や十返舎一九の名まで作品の中で持ち出したり、作中で実在したであろうと思われる店の名前を数多く取り上げたりして話に現実味と目新しさを持たせようとしている。筆を加えた春水によるものかもしれないが、ともかくも鯉文がそれまでの彼の作品とは少々異なる趣を出そうとした作品ではあるまいか。

『箱根草』の三人の主人公が箱根に着かないうちに、鯉文は二編で筆を断つ。その後の三編・四編は二世為永春水（為永春笑）の筆になる。そのことを二世春水は三編の中で彼からの手紙という形で、

（前略）然者日外瀧亭先生の導にて箱根へ湯治に御出のよし（中略）然るに此度板元よりの望みに任せ不都束ながら今より私が御案内いたし候得ば――

と述べ、又、登場人物である木賀蔵に託して、

（前略）為永は下手でも看官の最負目で見て下さるから悪いもいゝで通つていかアな

と述べて自作へとつなげている。春水の書いた続編は、非常に展開

が早く話そのものは鯉文作よりも活気がある。しかし、例えば四編で夜の山道を三人で歩いていて見知らぬ男と同道することになる所などは、『道中膝栗毛』五編下に同様の話があったりして、鯉文の作品と同様にうまく一九の『膝栗毛』の趣向を取り込んでいたりして他作者の模倣色の強い作品ではある。このように見ていくと本作品も春水たちとのかかわりなしには成立し得なかった作品のようである。

次に、純然たる合作として世に出た二つの人情本を見てみたい。一つは、『時水野明鳥後の正夢』（十五冊）という人情本で、二世南仙笑楚満人（為永春水）・瀧亭鯉文作、歌川国直・溪斎英泉画で、初編〜五編までで文政二〜七年刊である。発端は、二世南仙笑楚満人（為永春水）作、溪斎英泉画で文政六年刊である。作品の成立その他については、神保五弥氏の『為永春水の研究』^①に詳しいのでここでは述べない。初編は少なくとも新内「明鳥夢泡雪」の後日譚といえるものであり、全体の内容は春日屋時次郎と山名屋浦里が廓を抜け出た後様々な苦しい事乗り越えて幸せになるまでを描いたもので、内容的には読本や合巻風のものである。^④

もう一つは、『恋情奇聞於梁又改新製艶油舖』という人情本である。『国書総目録』によれば、本作は東里山人作で文政八年刊、六冊となっていて版本の所在は不明となっている。筆者の調査では、三康文化研究所付属三康図書館に現存していることが判明した。それと同時に本作は鯉文の合作物の一つであることがわかった。三冊で、画工は版本からは不明、瀧亭鯉文・二世南仙笑楚満人（為永春水）合作。出版書肆は、丁字屋平兵衛、鶴屋金助、柴屋文七である。刊年は、版本からは不明。この『新製艶油舖』には『艶鏡金化粧』という続編があった。三冊、作者は鼻山人、文政十一年の自序がある。

画工は不明・出版書肆は、自序の中に、
或日書肆文祐堂の主人予が草屋訪て……
とあるので文祐堂であろう。作品の内容は、どちらもお染と久松を
主人公とした恋物語である。

最後に、諸書において鯉文作といわれながら現存せず見ることが
できない作品を見ていこう。文政五年刊といわれる滑稽本『旧観
帖』四編は、『江戸文学辞典』、『滑稽本概説』(三田村篤魚)な
どにその名が見える。感和亭鬼武作・栄松斎画の『新編似旧観帖』
初編(三編(文化二、六年刊)の続編である。この鬼武作の『旧観
帖』は、「奥州の田舎者」が江戸見物に来て様々な滑稽を演ずるも
のであるが、鯉文作の四編が如何なる内容のものであったかは現在
版本がないために知るすべもない。四編は前掲の『滑稽本概説』中
の「四編は鯉文の継足し」^④によれば漢齋英泉画で二冊であったよ
うである。四編の奥付が詳しく書かれていることからこの文章の執
筆当時までには版本の所在がわかっていたのであろう。

一次は、滑稽本の『串戯二日酔』後編という作品である。『戯作者
撰集』・『戯作者小伝』、『戯作者考補遺』などにその名前が見え
る。名前のとおり、十返舎一九作、北齋・北嶺画『滑稽串戯二日
酔』(文化八年刊)の続編である。この作品は上記書に名前が上
がっているのみで内容・その他不明である。一九の作品は、大晦日
と元日に長屋で起こる様々な滑稽を描いたものである。

三番目は、『三方広人』という作品である。『戯作者撰集』・
『戯作者小伝』・『戯作者考補遺』にその名前が上がっている。こ
れらの書には「伊勢道中三方広人」(六冊)とあるが、該当する作
品を『国書総目録』であたると『物影三方荒神』(三冊)、別題
として『かかげまき宮シャユ道 三方荒神(外)』という滑稽本があ

るのみで、その作品は表野黒人作・翁齋姪成校で天保元年刊、前編
のみのものである。『三方荒神』という作品は『日本小説書目年
表』には瀧野登鯉作、歌川国芳画、瀧亭鯉文校及序とあり、その他
の事項は『国書総目録』の記述と同一である。本作品についてはそ
れ以上のことはわからない。

四番目は、『口八丁』という滑稽本がある。『滑稽口八丁』
(二冊)という滑稽本で浮世長屋という別題を持ち漢齋英泉画で刊
年はわからない。版本は日比谷図書館(現・東京都立中央図書館)
にあると『国書総目録』に書かれてはいるが東京都立中央図書館に
は所蔵していない。本作品は、神屋蓮州作・画の滑稽本『尺牘口
八丁』(二冊、文化四年刊)の続編である。神屋蓮州作の『口八
丁』は、長屋を舞台にその住人が様々な滑稽を演じるといったも
のである。蓮州作の正編は下巻のみしか現存せず、筑波大学本のよ
うに十返舎一九の序を持ち一九作となっているものもあつたりして
蓮州作の正編自体もまだまだ検討の余地ありといったところであ
る。したがって鯉文作の続編の内容もはっきりしない。

八

以上、文化十四年刊の処女作の滑稽本『大山栗毛後駿馬』初編
から天保九年刊の滑稽本『滑稽伊勢土産二見杯』に至るまでの全
作品、遺作・合作の作品、現存していないが諸書に名前があがって
いる作品など現在知り得る限りの鯉文作とされている全作品を見て
来た訳である。彼は戯作者として滑稽本と人情本の二つのジャンル
の作品しか書いていない。滑稽本が彼の作品の主力であるが、内容
の上からさらに分類すれば、

①いわゆる「膝栗毛物」の一種。

『大山栗毛後駿馬』^④(文化十四、文政五年刊)、『滑稽伊勢
土産二見杯』(天保九年刊)、『滑稽箱根草』(弘化元年刊)

など。

② 先行作家の続編

『浮世床』三編（文政六年刊）、『人間万事虚誕計』後編（天保四年刊）、そして、現在見ることができないが諸書に名前が見える『旧観帖』四編（文政五年刊）、『串戯二日酔』後編、『増口八丁』。

③ 茶番を主なる趣向としたもの。

『花暦八笑人』（文政三〜天保五年刊）、『滑稽 和合人』（文政六〜天保十二年刊）、『滑稽 牛島土産』（文政七年刊）など。

④ その他。

『滑稽 質屋雑談』（天保二年刊）。
『滑稽 笑話』
の四種類に分類することができる。

人情本の作品には、『菊ハ白山 靈験浮名の瀧水』（文政九年刊）、『新恋 女小学』（天保元〜二年刊）と、合作である『滑稽 明鳥後の正夢』（文政四〜七年刊）、『於染久松 新製艶油 情奇聞』（文政八年刊）がある。

これら、瀧亭鯉丈という戯作者の作品を一つ一つ見ていくうちにどうしても気になるのが為永春水という人物の存在である。そのことについて最後に簡単にふれておきたい。鯉丈の作品を見ていくとその成立過程に春水が深く関わっている作品がいくつもあることは前述の通りである。まず人情本『靈験浮名の瀧水』では為永春水が作品に目を通したことになる。又、人情本『女小学』では後集の執筆を為永連の作家である松亭金水が行っているし、滑稽本『人間万事虚誕計』においては鯉丈が書いたまま放置していた原稿を春水が出版したことになっている。滑稽本『箱根草』は春水補となっており鯉丈の草稿に春水が目を通して出版されたようである。

さらに、人情本『明鳥後の正夢』・『新製艶油舖』では春水と合作したことになっている。その他の作品でも春水は青林堂越前屋長次郎として出版書肆に加わったりして鯉丈や鯉文の作品との間に何らかのつながりを持っている場合がある。周知の如く、鯉文と春水は兄弟の関係であるという説もあることながら、作品づくりの上では両人はまことに密接な関係にあったと言える。鯉文の作品には春水の力なくしては日の目を見なかつたのではないかと思える作品もあり、それは鯉文が為永連の一家であり春水による戯作量産の一翼を担っていた可能性を示唆するもののように思われる。今後、そうした点についても説明を進めて行きたいと思う。（終）

「後注」

① 三編の版本は現存しない。

② 「十返舎一九論」、『中村幸彦著述集』第六卷「近世作家作品論」（昭和五十七年、中央公論社）

③ 刊記はないが、序や挿絵の中に「板元文栄堂」という記述が見られるからである。

④ 「鯉文は八笑人中の一人」、『滑稽本概説』所収、『三田村篤魚全集』第廿二卷（昭和五十一年、中央公論社）二百三十一頁参照。

⑤ 『日本国語大辞典』16（昭和五十年、小学館）。

⑥ 本田康雄氏が『式亭三馬の文芸』（昭和四十八年、笠間書院）の中で三馬の表現手法の一つとされている。

⑦ ただし、二編は、西村屋与八・丁字屋平兵衛、二編追加・三編は丁字屋平兵衛か（叙序の文章から）。

⑧ 三田村篤魚「『八笑人』の卒八」（『滑稽本概説』所収、前掲書）。

⑨ 「かついで喜ぶ嘘譚」、 「かつぎ茶番の『八笑人』」 (「滑稽本概説」所収、前掲書)

⑩ 金びら老婆の息子。

⑪ 角書は「とうじみやげ」と読む。

⑫ 二編序で春水は鯉丈のことを「予が雅兄瀧亭の叟」と呼んでいるからである。

⑬ 昭和三十九年、白日社刊。

⑭ 神保五弥氏「再説『明鳥後正夢』初編などの作者」、 暉峻康隆編『近世文芸論叢』(昭和五十三年、中央公論社)二百六十三〜二百七十頁。

⑮ 注④参照。

⑯ 天保三、四年に『大山西中膝栗毛』という題で改題再版されているが、同一本である。

—— 鎮西女子高等学校教諭 ——

「研究余滴」

夏目漱石作品中における「まだくはない」について

赤峯裕子

『三四郎』に次のような一節が出てくる。

(前略) 美禰子が

「丹青会の展覧会を御覧になって」と聞いた。

「まだ覧ません」

「まだ覧ません」という答えは「展覧会を覧たか」という問いに対するもので、まだ覧たことがない、「覧る」という経験をしていない、ということを表している。現在では、「覧ていません」というのが普通なのではないかと思う。この場合、「覧ていない」とは、いままさに「覧る」という動きが進行中であることを表す「覧ている」の打消ではなくて、「覧る」という動きが以前に行なわれた結果生じた事象が現在も継続していることを表す「覧ている」の打消である。つまり、ここでは「覧る」という経験がないことを表している。「まだ覧ない」が「(まだ)覧ていない」と同じ意味を表しているとすれば、「まだ」の果たす役割はいまよりも大きかったかもしれない。何故ならば、「覧ない」というのは「覧る」の打消で、現在より未来または意志の打消であると考えられるからである。「まだ」によって、過去にも「覧る」ということが実現していないことを明確に示し、故に、覧たことがない、という意味を表現しているのではないかと思う。同様の例として、いくつか掲げてみよう。

その三円は五年経った今日までまだ返さない。

おれは教頭に向って、まだ誰にも話さないが、これから